

平成28年度金沢大学学校教育学類附属学校園連携G P
(附属学校園連携G P) 活動成果報告書

取組名称 (全角20字以内)	協働探求型学習の実践手続きの体系化			
	副題(サブタイトル)			
取組学校等	附属小学校			
連携学校・学類	学校教育学類	取組期間	平成28年4月～平成32年3月 (4年 0ヶ月)	
ふりがな	よしかわ かずよし	所属校園名	附属小学校・校長	
実施担当責任者	吉川 一 義	及び職名		
電話番号	076-264-5511, 076-226-2111			
e-mailアドレス	Kazuyosi@ed.kanazawa-u.ac.jp			

1. 取組の活動内容と成果

※取組の具体的な実施内容と成果について、当初設定した目的・趣旨・期待される教育効果に照らし、1ページ程度で分かりやすく記述してください。必要に応じ、図表等を用いても構いません。

※成果物等がある場合は、この報告書とあわせて提出してください。

1. 取組全体の目的

今日の学校教育では知識伝達型学習から「協働」探求型学習への転換が課題となっている。教師は既有知識の伝達者ではなく、子どもと共に学び続ける促進者になければならない。本校の教育理念と過去3年間の実践研究の蓄積は、このパラダイムシフトに合致したものである。この取り組みでは、本校の教育実践研究を再検証し、教育活動の手続きを体系化する。これより①「思考の往還過程を可視化する」方法と技術を研究し、②これを用いて実践検証しつつ③教育活動の手続きを再構築・体系化する。これらの成果は、①教育実践研究の実証性を高める方法論を提供する。この方法により再検証された知見に基づく②・③本校教育方法とその体系化は、現代的課題への実践方法を提供する。これらの成果をもって教員養成教育に加え、現職教員の研修機能を担うことに資する。

2. H28年度の成果

1) ①「思考の往還過程を可視化する」方法と技術の検討(発話内容のテキストデータ化) [物品費]

対話型授業における教師と児童の発言、グループ学習での各児童の発話内容をリアルタイムでテキストデータ化して蓄積・表示する技術を検討してきた。発話内容テキストを表示しながら、問いに対する答えを導き出す過程で、どのような知識内容にアクセスし、どのような関係づけにより意味の抽出(答え)に至ったのかを、構造的に分析することを目指している。今年度は、NECの技術協力を得て、発言

のテキストデータ化に取り組んだ。発話のテキストデータ化技術は、既に議会での議事録作成システムとして商品化されているが、学校現場での使用には技術的・経済的に耐えられない。結果、授業場面環境下での発言ではテキストデータ化の精度が十分に得られなかった。また、現在の技術は大人の音声データベースに依存しているため、児童の音声には対応できていない。これより、発言環境の整備と併せて、児童の音声データベース作成により、テキストデータ化の精度向上を目指し、次年度以降の継続課題となった。文科省「次世代学校支援モデル構築事業」公募が出次第、応募する予定である。

2) 検討課題②・③：「教育方法とその体系化検討」への資料収集 [旅費]

本校の教育課程・方法・実施手続きの体系化に国際性の視点を加えた検討を行なった。このため、国際バカロレア (IB) が推奨する国際標準のカリキュラムモデルを学び、本校カリキュラムマネジメントに生かすための資料収集を行った。PYP (Primary Years Programme; 3歳～12歳までを対象とした初等教育課程) 研修への参加、認定校を目指す先進校の教育研究会に教員を派遣しての資料を収集した。

- (1) 東京学芸大学附属大泉小学校の平成28年度全国公開研究会 (H29年1月28日 (土) 開催) 「グローバル社会に生きる力を育む～国際バカロレア (IB) の教育理念を取り入れた小学校教育過程の開発～」に2名の小学校教員を派遣した。
- (2) IBワークショップ(2017年4月3日～5日の3日間、福井大学を会場に開催)に1名の小学校教員を派遣した。PYPの概念とカリキュラムモデルについての研修を受けた。PYPは、日本の学習指導要領との親和性が強いプログラムとされる。このため、導入においては、大きな変更を必要としない反面、従来の教育プログラムとの違いを慎重に検討し、明確にしなければならない。

2. 平成28年度の実施計画に対する達成度の自己評価

評価 (いずれかに○)	評価の理由
a. 達成できた	<p>検討課題①の「子どもの発話」テキストデータ化には、技術的な壁が大きいですが、今年度の実施を通してNECとの技術提供を受けた共同研究の端緒を得た。</p> <p>検討課題②・③については、本校教育に国際性の視点を取り入れるためにIBのPYP認定校を目指すための端緒を得た。</p>
<input checked="" type="radio"/> b. おおむね達成できた	
c. あまり達成できなかった	
d. ほとんど達成できなかった	

3. 今後の目標・展望

※今年度の実績を踏まえ、今後の目標・展望を500字程度で記述してください。

① 発話内容のテキストデータ化に向けて

・日常の授業環境を調整してS/N比を良好に保ちながら、発話データ収集と精度の高いテキスト化を目指す。当面は、理科授業と図工科授業を対象として、使用環境の調整と子供の発話データにも続くデータベースの構築を目指す。合わせて、発話から、知識の使用範囲・水準と内容の適正性、知識と知識の関係づけによる意味の抽出過程など、分析視点を確立して、児童の学習過程の変容を評価する。

②・③ 「教育方法とその体系化検討」に向けて

・引き続きIBワークショップに小学校教員を複数派遣し、IBの理念とカリキュラム・学習内容についての理解を進め、IBプログラム導入の可能性を検討する (IBにSIFを提出してIB認定候補校となる準備を行う)。その際に、IBプログラムに関心を持つ、東京学芸大学附属大泉小学校、福井大学教育学部附属義務教育学校 (小中一貫校) との情報交換を行いながら手続きを進める。